

憬興『無量寿経連義述文賛』所引外典考

池田昌広

〔抄録〕

憬興は七世紀朝鮮の学僧である。かれの『無量寿経連義述文賛』は『無量寿経』の注釈書である。憬興は施注にあたりすくなくからず外典を引用している。小論はそれら外典が何から引かれたのかを調査した。その結果、これらは原典から直接引かれたのではなく、玄応『一切経音義』と『玉篇』とからの孫引きである

ことが明らかになった。とくに前者を憬興は重用していたらしく、後者の利用は補助的であったことが判明した。また陸法言『切韻』の利用も明らかになった。
キーワード 憬興、無量寿経連義述文賛、玄応、一切経音義、玉篇

はじめに

憬興（璟興とも）は七世紀に生存した古代朝鮮の学僧である。著述の巻帙にとむこと元暁・太賢に比肩し統一新羅を代表する学匠とされる。ただ四十餘部をかぞえたという憬興の著作はほとんど散佚し、現存するのはわずかに『三弥勒经疏』一卷と『無量寿経連義述文賛』（以下、『述文賛』）三巻との二部のみである。^①

小論は『述文賛』の引く外典の典拠を論じようとするものである。該書は書名からもうかがえるように『無量寿経』の注釈書である。憬

興の晩年、七〇〇年ごろの撰述と推される。^②『述文賛』が種々の内典を引くのはむしろだけ、該書に顕著なのは小学書を主とした豊富な外典の引用である。それらは経文の難読の文字について適切な訓詁を得るためになされた。その達者なさまは同時代の唐僧による論疏と比較しても遜色がなく、憬興は外典にも明るい僧だったという評価があった。^③

しかし博引と思われた引用の大半は、玄応『一切経音義』（以下、『玄応音義』）からの孫引きであることがすでに指摘されている。^④『玄応音義』はおそくとも龍朔年間（六六一―六六三）成立と推される唐

の音義書である。⁽⁵⁾『述文贊』に『玄応音義』は出名しないが、両書の文章には確かに偶然ではすまされない多くの一致がある。ただこの一致をもって、ただちに『玄応音義』を直接の出典に擬することには問題があるといわねばならない。何となれば、後述のように憬興は原本系『玉篇』（以下、断らないかぎり小論のいう『玉篇』とは原本系のそれ）からも外典を転引しているからだ。『玄応音義』と『玉篇』とは共通する文章が多い。そのため『玄応音義』に一致する文章は『玉篇』にもあった可能性がある。日本の「上代の仏典音義や仏典注釈書の訓詁の出典を考えるばあい」、「玄応音義」か『玉篇』かの判定には困難さがつねにつきまとう⁽⁶⁾」というのは、『述文贊』にもあてはまる。ある部分の『玄応音義』利用をいうには、同書との一致のみならず、それが『玉篇』によっていないということをあわせ明示しなければならぬ。先行研究はこの点への配慮が充分でないように思われる。

小論は、憬興の引いた外典の直接の典拠が何であったかを究明するにあたり、文章の一致のほか、『玄応音義』か『玉篇』か択一の論拠を見出すことに努力するはずである。その結果、『玄応音義』と『玉篇』との併用を明かすことになるだろう。ただ両書の参照には、主に『玄応音義』を、従に『玉篇』をという序列があったようで、この点も調査の過程で明らかになる豫定である。また憬興の陸法言『切韻』（以下、陸氏切韻）利用についても一節を割いて論ずることにしていく。

一 『述文贊』外典引用条一覧

『述文贊』は「来意」「积名」「解本文」の三部分より成る。前二者の文字量は極少で「解本文」が該書の大部分を占める。「解本文」では「経曰○○○者」または「経曰○○○至○○○者」の形式で注解する経文の範囲を明示したあと、憬興による注文がつづく。外典の引用はこの注文のうちに見られる。

以下に、『述文贊』の外典を引いている部分を列挙する。便宜二十六条に分け①から②⑥の番号をふった。『述文贊』のテキストは、大正蔵本（第三十七卷一七四八）により新纂大日本続蔵経本（第二十二卷三九八）で校勘した。両本の底本はともに元禄十二年刊本で、校勘はただ大正蔵本の誤植を恐れたからにすぎない⁽⁷⁾。小論は憬興の引く外典の出処が分かれば充分なので通行本で用は足る。各条末尾の数字は大正蔵本の頁数と上中下段の別とで史料の所在をしめしている。書名ないし撰者名などには傍線を附した。へゝ内は原文双行注。『無量寿経』（大正蔵第十二卷三六〇）を引くばあいは同様のやり方だめす。

ついでに『述文贊』以外の使用テキストについて一言しておく。『玄応音義』および慧琳『一切経音義』（以下、『慧琳音義』）は、徐時儀校注『一切経音義三種校本合刊』（上海古籍出版社、二〇〇八年）所収本により頁数と上下段の別とをもってその所在をしめす。徐本は底本の麗蔵本に詳細な校勘をほどこし、いま両音義の最善本と思われる。『玄応音義』の検索には、徐本に対応した王華権・劉景雲編『一

切経音義三種校本合刊索引』（上海古籍出版社、二〇一〇年）と、大治本（缺落部分は麗藏本で補配）の影印（汲古書院、一九八〇・八一一年）および大日本校訂藏経本に対応した沼本克明・池田証寿・原卓志編『一切経音義索引』（汲古書院、一九八四年）とを併用した。⁽⁸⁾『玉篇』は『原本玉篇残卷』（中華書局、一九八五年）により所在をその頁数でしめす。『篆隸万象名義』は『高山寺古辞書資料第一』（東京大学出版会、一九七七年）によった。『玉篇』の佚文については、岡井慎吾「玉篇佚文」（『玉篇の研究』東洋文庫、一九三三年）、馬淵和夫「玉篇佚文補正」（『東京文理科大学国語国文学会紀要』第三号、一九五二年）をはじめ多くの輯本の恩恵をうけた。『切韻』残巻諸本の比定および掲出字の所在調べには、上田正編『切韻残巻諸本補正』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、一九七三年）を利用しこれに準拠した。王仁昉『刊謬補缺切韻』（以下、王氏切韻）は龍宇純『唐写全本王仁昉刊謬補缺切韻校箋』（香港中文大学、一九六八年）によった。

- ① 綜、子送反、習也。陸法言切韻云、機縷也。音並同也。非此中義（一二六中）。
- ② 裂〈呂蘗反〉陸法言切韻云、破也（一四二中）。
- ③ 梵云、阿僧祇此云、無央數。王逸云、央尽也。說文鞅頸韗也。非此字体也（一四七下）。
- ④ 戢〈墮六反〉集也撰也。陸法言切韻云、止也（一五三下）。
- ⑤ 廓〈古惡反〉爾雅大也（一五四上）。

⑥ 赫〈呼格反〉切韻云、赤也。毛詩云、赫赫師尹、註云、赫赫盛貌也。焜〈胡本反〉切韻云、火光也。又作煜〈由鞠反〉盛也曜也（一五五上）。

⑦ 溪亦作谿字、苦奚反、爾雅水注川曰谿、注谿曰谷、注谷溝也。渠

〈呂居反〉溝也。廣雅故坎也。字林小瀆深廣各四尺也（一五五上中）。

⑧ 五音者即詩云、宮商角徵羽擬五行之音。今言宮商者即略拳初二也、宮者龜、商者細也。和者応也。不違冒音、故云自然和（一五六中）。

⑨ 交露者幡也。字林幡幕法似垂露故、即地莊嚴故（一五六下）。

⑩ 殆〈徒改反〉近也幾也。坐者罪也、蒼頡篇坐辜也、塩鉄論曰、什伍相連親戚相坐也。怙〈胡古反〉福也。厮極者尽疲之義。享者、爾雅福厚也（一五七下）。

⑪ 曄〈于鬼反〉說文盛明貌也。曄〈為韶反〉華光盛也、又曄〈王輒反〉草木華貌。煥者明也、爛者文章鮮明也（一五八上）。

⑫ 玉篇云、一尋八尺也。又云、七尺此似非也。応同刃故（二六一上）。

⑬ 灑怡說文和悦也、方言怡喜也（一六一上）。

⑭ 今唯論語、於天下無所適莫也。適親也、莫疎也（一六一中）。

⑮ 礼記三十壯有室、玄公曰、有室有妻也、蓋論語由也升堂矣、未入室也（一六五上）。

⑯ 猥〈烏罪反〉惡也、字林衆也、廣雅頤也又雜也。擾者乱也。忽又作忪、古文忪〈之容反〉方言怔忪遑遑。頼〈洛代反〉孝經曰、一人有慶兆民頼之、註云、頼、蒙也。聊者甘也（一六五上）。

⑰ 苦又作恪、古文憲〈苦各反〉字林恪恭敬也……典者常也、申常道故、廣雅典主也。攬者撿之在手又取也（一六五中）。

⑱野人者、孔子曰、先進於礼楽謂野人、後進於礼楽謂君子也、包氏曰、謂鄙陋也、郊外曰野、邑外謂郊（二六六下）。

⑲眊者〈眠見反〉説文邪視也、又下戾五戾反、説文恨視也、睺〈力代反〉説文瞳子不正也、蒼頡篇内視也、傍視也。……擊者司馬彪曰擊動也（一六七上）。

⑳蹇〈居免反〉左伝偃蹇驕傲也、広雅大嬌也、謂自高大貌也、釈名云、偃偃息而臥不執事也、蹇跛蹇也、痛不能作事也（一六七中）。

㉑蹉〈千阿反〉跌〈徒結反〉通俗文失躡曰跌、広雅差也、亦偃也、業報運数終不参差故、即不違之義（一六七中）。

㉒辜〈古胡反〉爾雅罪也、較、苟学反。粗略也。広雅明也見也、謂較然易見也（一六七下）。

㉓魯〈力古反〉孔安国云鈍也、方言何也。扈〈胡古反〉漢書音義曰、跋扈自縱恣也、薛綜曰、勇健貌、又作虜扈、謂縱橫行也、虜人獲也、戰而俘獲也。六親者、有説父親有三母親有三合有六親、或有引世語以申難定。応劭云父母兄弟妻子、王弼云父母兄弟夫婦、皆違持頌云父之六親母之六親（一六七下）。

㉔邑者、周礼四井為邑方二里也、九夫為井方一里也。説文八家一井也。聚落者、小郷曰聚、広雅落、居也、謂人所聚居也。厲〈力制反〉疫厲也、人病相注也。釈名云病氣流行中人也。戈〈居和反〉平頭戟長十尺六寸或六尺六寸也（一六八中）。

㉕汗者熱氣所蒸液也〈下旦反〉、又汚〈烏臥反〉泥著物也。説文穢也。宜從初也。今言浩汗者布水貌（一六八下）。

㉖芬者、方言芬、和。謂芬香和調（一五七下）。

二 出典調査

調査にききたち出典究明の難点および手順について述べておきたい。上掲二十六条に見える各種外典の大半が原典からの直引ではなく、『玄応音義』『玉篇』からの孫引きであることは、後述するように蓋然性がたかい。本来は『述文賛』所引外典文・『玄応音義』・『玉篇』の三者を比較し結論を得るべきだが、十全な比較が可能な例はまれである。『玄応音義』は完存するものの、『玉篇』がその三分の二を佚し比較の材料がそろわない。三者の満足な比較ができるのは、施注字と『玉篇』残巻の掲出字とが一致した幸運なばあいに限られる。それ以外は『玉篇』を抄録した『篆隸万象名義』と『玉篇』の佚文とで代用するしかない。しかし前者は『玉篇』の極少部分をつたえるに過ぎず、後者は蒐集に限界がある。

出典究明の困難はこれだけにとどまらない。『玄応音義』と『玉篇』とはしばしば共通する文章をもつ。玄応が音義作成に『玉篇』を利用したとする説が提出されているほど両者の記述はよく一致する¹⁰。果たして『述文賛』所引外典文の同文が『玄応音義』に見出せたとしても、『玉篇』の散佚部分にも同文のあった可能性がつきまとうので、出典が『玉篇』か『玄応音義』か択一しにくい。

そこで出典調査はつぎの手順ですすめる。まず『玄応音義』と『玉篇』残巻とに出典に相応する文章をさがす。具体的には『述文賛』の施注字Xを、『玄応音義』では掲出句にふくむ条文を、『玉篇』残巻では掲出字とする条文を比較するのである。『述文賛』『玉篇』『玄応音

義』の三者がXについてどう注解しているか、平等に比較できれば確度のたかい出典の究明が可能である。ただし『玉篇』残巻がXを掲出することは稀だから、いきおい『玄応音義』のみに目当ての文章をさがすことが多くなる。そのさい『玉篇』によった可能性を払拭できるか検討する。『玄応音義』に類似の文章がないばあい、『玉篇』によった可能性が高いので『玉篇』との関わりを追求することになる。迂遠なやり方だが、すべては最大の障碍である『玉篇』の不全を克服するためである。

a 『述文贊』『玉篇』『玄応音義』の直接比較が可能な例

調査をはじめよう。まず①から②⑥のうち外典を引いた施注字が『玉篇』残巻に掲出されているか否かを調べなくてはならない。該当するのは⑪「典」・⑫「較」・⑭「厲」の三字である。¹¹⁾『玄応音義』にもこの三字をふくむ掲出句が複数見つかった。こうしてはじめて「典」「較」「厲」の三字について、『述文贊』『玉篇』『玄応音義』の各文を比較する準備がととのう。

⑪「典」は経文「典攬」(二七五中)の注記である。『玉篇』残巻の「典」(三二二)に引く『周礼』鄭玄注が「典、常也」「典、主也」とあるのが⑪に符合するけれど『広雅』の名が見えない。憬興が「典主也」の典実とするのは『広雅』であって鄭注ではない。ひるがえって『玄応音義』では「典」をふくむ掲出句として「典誥」(一五七下)、「典領」(二九七上)、「典刑伐」(四九四下)の三条がまずひろえる。このうち「典領」「典刑伐」に「広雅典、主也」の文字があって⑪に

一致する。ただ「典者常也、申常道故」に應ずる部分がない。「申常道故」は稀見の句で憬興みずからの按文の可能性がたかい。状況的には『玄応音義』出典説に有利ともいえるが、「典者常也」が『玉篇』にあって『玄応音義』にないのは気になる。「典」を載せる『玉篇』巻十八は顧野王原撰本にちかいとされる。¹²⁾憬興が利用した『玉篇』が原撰本ではなく顧野王以後の増補本であったならば、それに『広雅』の引文が載り「典、主也」を引いた可能性は残るとはいえる。

しかし、⑪「典」前直の「苦」につけた憬興の注記の出典を調査することで、⑪「典」が『玄応音義』によった可能性をたかめることができる。⑪「苦」は経文「謙苦」(二七五中)の注解である。『玄応音義』の「○苦」「苦○」に類似の文章はないけれど、「○恪」には酷似する文がある。たとえば巻三「謙恪」(六六下)には「古文愆同。苦各反。字林恪、恭也、敬也」とある。ほかの「○恪」もほぼ同文の注をほどこす。「苦」「典」のほぼひとつづきの施注を『玄応音義』一書だけでまかなえるのだ。ついでにいえば、⑪「攬」も『玄応音義』巻十一「擊彼」(二二七上)に「又作攬搯二形同……広雅攬、取也。攬、持也」、同巻十二「攀攀」(二五〇上)に「広雅云、攀、取也」とあって一部だけと符合が見出せる。もっとも『玉篇』の「苦」「攬」により出典にふさわしい文章があった可能性はつきまとう。両字の『玉篇』佚文さえ知られないまま疑問は継続するけれど、⑪の一連の注記は『玄応音義』を利用して書かれたと考えれば説明しやすい、とはいえる。

⑫「較」は経文「辜較」(二七七上)の注記である。『玉篇』残巻に

は、「典」とおなじ卷十八に掲出される（三二八）。『玉篇』の「較」には「字書亦較字也」とあり、その直前「較」のうちに「較」の注記がならぶ。そのうち『尚書大伝』鄭玄注から「較、猶見也」、『広雅』から「較、明也」、『漢書』から「較然易知」と引いているのは②に類似する。これらによっても②「較」の注記は書けそうだが、『玄応音義』にいっそう②「較」に類似した文が見える。『玄応音義』卷十一「較之」（二三四下）に「古字反。広雅較、明也見也。謂較然易知易見也」とあるのがそれだ。同条には「粗略也」の対応句を缺くが、同卷四「都較」（八二下）に「古字反。較猶粗略也。広雅較、明也」（卷七、一五九下「都較」もほぼ同文）とあるから、現行「較之」には「較猶粗略也」の脱文がうたがわれる。②「較」注の出典としては『玉篇』より『玄応音義』がふさわしい。

②「較」注の『玄応音義』利用説は、「辜、較」のもう一方②「辜」注の出典調査によっても支持される。『玄応音義』卷二「无辜」（四七下）、同卷二十五「無辜」（五〇七下）両条にひとしく「古胡反。爾雅辜、罪也」とあるのは②「辜」注とほぼ全同である。¹³『玉篇』残巻に「辜」はなく佚文も確認できず、『玉篇』に②の出典にふさわしい文章がなかったとは断定できない。しかし「辜」と「較」とひとつづきの注文で出典を想定したばあい、『玉篇』では十全な注文を得られないとはいえる。②はともに『玄応音義』によったと考えるほうが合理的である。

②「厲」は経文「災厲」（二七七下）の注記である。『玉篇』残巻の卷二十二に「厲」の掲出がある（四六三）。比較的長い注解ながら

②「厲」注に一致する文章は皆無である。ひるがえって『玄応音義』には酷似する文章がある。卷二十一「疫厲」（四三八下）がそれで、「力制反。人病相注曰疫厲。积名云、厲、病氣流行。中人如歷厲傷物也」とある。『玉篇』から②「厲」は書けないのだから『玄応音義』によった蓋然性はたかい。②については後段に再説するはずである。

以上、①「典」・②「較」・④「厲」の三字について憬興が引いた外典文の出典を論じた。これらは、『述文賛』『玉篇』『玄応音義』三書の注文の直接比較が可能な数少ない条目である。検討の結果、②「較」と④「厲」との外典文が『玄応音義』からの間接引用であるとたかい蓋然性をもっている。①「典」も同様であった可能性はたかい。これら三字は上掲の二十六条から見ればわずかではあるけれど、憬興が『玄応音義』を手許において『述文賛』を制作したことを推測させる。この推測は次節の調査で補強されるだろう。

b 『玄応音義』の利用

『玄応音義』利用の徴証は前節で指摘した二ないし三例にとどまらない。本節では『玉篇』残巻に掲出のない文字について、『玄応音義』利用の徴証を搜索する。上述のように、『玄応音義』と『玉篇』とは共通の文章がすくなくない。『玄応音義』か『玉篇』か典拠を択一するには、『玄応音義』と『述文賛』との一致を列挙するだけでは不十分である。『玉篇』散佚巻に同文があった可能性を払拭できないからだ。しかし『述文賛』との一致にくわえ、『玄応音義』からしか引用できない文章が『述文賛』にそなわる例がある。それらは『玉

『玄応音義』の利用をいい得る例である。

まず②に着目しよう。該条は経文「偃蹇」(二七六下)についての注記である。『春秋左氏伝』哀公六年の伝「彼皆偃蹇」に杜預が「偃蹇、驕敖」と注している。『述文贊』が引くのは経伝ではなく集解であった。『広雅』はその巻六「釈訓」に「偃蹇、天橋也」とある。『釈名』は巻三「釈姿容」の文章で、現行本は「偃蹇也、偃息而臥不執事也。蹇跛蹇也、病不能作事。今託病似此、而不宜執事役也」に作るけれど、前半の字面には疑義がある。隣接する諸条の体例から見てもそれは『述文贊』所引文と類似の本文を有していたと思しい。たとえば畢沅『釈名疏証』は「偃蹇也」之「也」乃「偃」字之誤」とい「也」字をけずって「偃」字を挿入すべしという見解で、これが大方の支持をえているようだ。¹⁴ 憬興が「偃蹇」の注解に引いた『春秋左氏伝』『広雅』『釈名』の文章は確かにこれら三書に見つかった。直接引用とすれば憬興の博覧の成果ということになる。

じつは『玄応音義』巻三がまさしく「偃蹇」を掲出し、これを参照すれば何とも『春秋左氏伝』などを見ずともくだんの文章を作られる。『玄応音義』該条には「居免・紀偃・巨偃三反。左伝偃蹇、驕傲也。広雅偃蹇、天橋也。謂自高大貌也。釈名偃、偃息而臥不執事也。蹇、跛蹇也。病不能作事、今託似此也」(五九下)とある。¹⁵ 『左伝』ほかからの引用文は②のそれにほぼ同一といってよく、左伝↓広雅↓釈名の引用の順次もおなじである。また②「謂自高大貌也」は『広雅』現行本にはない。『広雅』の体例から現行本の脱文は考えにくく、該句は

『広雅』の文章ではないと思われる。そもそも該句は『玄応音義』以外に検出できず玄応自身の按文である可能性がたかい。『玉篇』にこの句はなかったと思われるから、「謂自高大貌也」の挿入位置と文句とが『述文贊』と『玄応音義』とで共通する事実は、憬興が『玄応音義』を実見している明証である。同時に『春秋左氏伝』ほか三書の引文が直接引用ではなく『玄応音義』からの孫引きであることを告げている。¹⁶

ついで②。これは経文「蹉跌」(二七六下)への注記である。「通俗文」とは、すでに佚した漢・服虔『通俗文』一卷と思われる。複数の輯本があるが、こころみに『玉函山房輯佚書』の同書の項を閲すれば「失躡曰蹉」の四字がひろってある。採録源はおそらく『玄応音義』(二八〇上、二五八上)であろう。『広雅』の「蹉」を「差也」に解した文字は現行の『広雅』には見えない。しかし今の巻立てでいえばその巻四に本来はあったようだ。『広雅』巻四「釈詁」の「僭忒朏朧差也」について、王念孫『広雅疏証』巻四下は「文選解嘲注、思元賦注、並引広雅蹉差也。衆経音義卷八卷十卷十二卷十七引広雅、並与文選注同。今本脱蹉字」と注する。王氏のいうとおり、揚雄「解嘲」(『文選』巻四十五)と張衡「思元賦」(『文選』巻十五)との李善注には、ひとしく「広雅曰、蹉、差也」の文字がある。目当ての文句は『述文贊』の引くとおり『通俗文』『広雅』に見つかった。

ここで王念孫の言及した「衆経音義」つまり『玄応音義』の「蹉」についての注記を見てみれば孫引きの可能性が浮上する。『玄応音義』巻五に「超日明三昧経」より「蹉跌」が掲出されている。それに

は「千何反、下徒結反。蹉跎也。失躡曰跌、跌差也」（一一〇下）とあるのみで典実を見ないが、この注記には脱文がある。じつは『玄応音義』同条を『慧琳音義』が流用している。そこには「千何反、下徒結反。蹉跎也。通俗文失躡曰跌。広雅云、跌差也、亦偃也」（卷三十四「蹉跎」。一一一七上）とある。ここに「通俗文」「広雅」の書名が出てきたことより、書名を略さない『玄応音義』テキストの存在が推定できる。原典に当たらずとも『玄応音義』一書でことはすんでしまう¹⁷。どうしたことか、『玄応音義』現行本の「超日明三昧経」の音義部分には書名の省略が多い。一連の省文について徐氏は無言である。『玄応音義』現行本の系譜関係は非常に複雑であることが知られている¹⁸。異文もすくなくない。『玄応音義』現行本に不見だからといって、ただちに『玄応音義』以外を出典に擬すれば結論を誤る危険がある。

⑳と㉑とは近接している。㉑の執筆に『玄応音義』を参照しただろう憬興が、直後の㉒を書くのに『玉篇』など別書を見ただろうか。その選択は非効率と思われる。ひきつづき『玄応音義』から転引し㉒を書いたと考えるほうが合理的だ。両条は『玉篇』利用の可能性を排し『玄応音義』利用をみちびける稀少な例である。『述文贊』と『玄応音義』とに共通する文章の多いことは、『玄応音義』を検索してみれば容易に諒解される。ただ共通を指摘するだけでは出典の特定に不十分であることは上述のとおり。㉑㉒のように共通プラスαが必要だ。そのような例はほかに若干ひろえる。

たとえば⑬。直前部分には脱文があるようだが、該条は経文「熙

怡」（二七三下）の注である。『玄応音義』は卷三（五七上）と卷二十五（五〇九上）とに「熙怡」についてほぼ同文をする。前者でいえば「説文熙怡、和悦也。方言怡、喜也。湘潭之間曰紛怡、或云熙怡」とあって⑬を案出できる。憬興は『方言』の文章を「怡喜なり」あるいは「怡は喜なり」と訓んでいるようだが、これは原文どおりではない。『方言』卷十の原文は「紛、怡、喜也。湘潭之間曰紛怡、或曰熙怡」とあり「紛怡」が一詞である。⑬には「紛」字が落ちていのだ。この脱字は『方言』原典によらず、同様に「紛」字を落としている『玄応音義』から孫引きしたことに起因すると思われる。『玉篇』も「紛」字を落としていた偶然は考えにくく『玄応音義』利用に落ちつく¹⁹。

⑩の「坐者」云々も、『玄応音義』卷二「坐此」の「慈臥反。案坐罪也、謂相縁罪也。蒼頡篇坐幸也。塩鉄論曰、什伍相連、親戚相坐……」（四八下）によっているだろう。『蒼頡篇』から『塩鉄論』へと連続して引用されるさまが、⑩「坐」の注記と『玄応音義』とにはほぼ全同することに注意したい²⁰。『玄応音義』が『塩鉄論』を引くのはじつに該条のみで、これが⑩と共通するのは偶然とは思わず、『玉篇』ではなく『玄応音義』からの転引と考えるのが穏当ではなからうか。

『玄応音義』からの転引は⑩⑬⑭⑯および上述の⑰⑱⑲の七条にとどまらないはずで、同書の広範な利用は推量するを得るであろう。しかし『玄応音義』だけですべての外典を引けない。それらは『玉篇』から引用されたと推量される。

c 『玉篇』の利用

『玉篇』の利用もほぼ確実である。『述文贊』には、⑫に「玉篇」の名が一例（「又云」を算入すれば二例）現れる。²¹ 経文の「一尋」（二七三中）が八尺であって七尺でないとする注記である。『玄応音義』に「玉篇」の名が見えるのは一箇所のみ、それも後世の追補であろうというのが通説だから、『玄応音義』から「玉篇云」と引くことはかなわない。⑫は『玉篇』からの直接引用と思われる。

研究者には周知のように、『玉篇』には注記の豊富なバージョンと簡略なバージョンとおおきく二種類ある。そもそも『玉篇』三十巻は梁の大同九年（五四三）に顧野王が編んだ字書だが、有力な小学書の常として、『玉篇』も原撰本が成つてのちいくつもの改訂本がつくられた。改訂は大局的には内容の簡略化に向かった。もともと『玉篇』は内容が豊富で引書の多さから類書的使用を可能としたが、その反面字書としては使いづらい代物であった。改訂はこれを字書に特化しようとする動きで、その最終形が『大広益会玉篇』（一〇一三年成。以下、宋本『玉篇』）である。これは完存しており注記の非常な簡略ぶりが知られる。注記の豊富なバージョンは原撰本に近いわけで、原本系の頭辞をつけ原本系『玉篇』と呼ばれる。簡略なバージョンつまり宋本系と区別するためである。

憬興が参照した『玉篇』は宋本系ではなく原本系と考えられる。宋本『玉篇』（中華書局影沢存堂本、一九八七年。一三三頁下）の「尋」の項は、「似林切。繹也、理也、重也、用也、遂也」と注記があるのみ、⑫にあった「八尺」云々の記述はない。宋本『玉篇』以前の宋本

系『玉篇』がどうであったか分明でないが、憬興が手にし得た宋本系に一尋が八尺であることを注したバージョンのあった可能性はひくいと思われる。上元元年（六七四）に成った上元本『玉篇』は、総字数などから見て宋本『玉篇』とほとんど同一であった蓋然性がたかい。²² つまり『述文贊』の成立を前にして宋本系は「八尺」云々の記述を省略していたと推されるのだ。憬興は原本系からしか『玉篇』の「八尺」云々の注記を引けない。

『玉篇』残巻に「尋」はふくまれず佚文の存在も確認できない。『篆隸万象名義』は「尋。似林反、重、八尺、為」（六帖一七八オ）とあるのみで、⑫と『玉篇』とのつき合わせを果たせない。⑫の『玉篇』文は新得の佚文ということになろうか。²³

『玄応音義』に「一尋」の掲出は、巻十七（三六七上）、巻二十五（五一〇上）の二箇所ある。ともに⑫と同様に一尋を八尺にとる文献を引いているから、憬興は例のごとく『玄応音義』から引用してことをすますことも可能だった。後述するように、憬興は『玄応音義』を優先的に『玉篇』を補助的に利用した。にもかかわらず、なぜ『玄応音義』ではなく『玉篇』を引載したのか。臆測にすぎないが、『玉篇』の「七尺此似非也」の文字を引くためだったかもしれない。当時の新羅浄土教に一尋＝七尺説がおこなわれたようで、たとえば義寂『無量寿経述義記』が「一尋猶是七尺、皆依自身之一尋也。釈迦身量丈六、故以七尺為一尋」²⁴という。義寂は憬興と同時代人で、憬興が破斥する浄影寺慧遠系の浄土教につらなる学匠である。⑫には一尋＝七尺説への批判の意味があろう。

憬興が『玉篇』を挙名するのはこれだけだが、有力な字書たる該書の利用が⑫に限られるとは常識的に考えにくい。そこで調べてみると、ほかの注記でも『玉篇』を利用している徴証が得られた。たとえば⑦である。該条は経文「溪渠」（二七〇上）について、「溪」各字を注する。まず「溪」について、『玄応音義』で「溪」をふくむ掲出句は「溪沼」（卷二十三、四六八下）のみである。そこには「又作谿同。苦奚反、下之遶反。爾雅水注川曰谿。説文沼、小池也」とある。ひるがえって『爾雅』を閲すれば、「积水」に「水注川曰谿、注谿曰谷、注谷曰溝、注溝曰澮、注澮曰瀆」とある。⑦「溪」の注記が引くのは、「溝（也）」まで一つづきの『爾雅』経文ということになる。つまり、⑦の『玄応音義』からは⑦の『爾雅』は揃わない。では憬興は何を見たのか。『爾雅』原典を手にとったとは思えない。

ここで着目したいのは、⑦「溪亦作谿字」と『玄応音義』上掲「又、作谿同」との形式の相違である。『玉篇』が「A亦為B字」の形式を多用するのに対し、『玄応音義』はもっぱら「A又作B同」式にのつとる。⑦はあきらかに『玉篇』の注記形式である。憬興が「A又作B同」式をわざわざ「A亦為B字」式に改易する必要はないから、くだんの形式差は『玉篇』利用の一証である。

つぎに「渠」。『玄応音義』の「渠」を掲出字にふくむ条を通覧するに、該条を案出できる文は見えない。該条については、むしろ『玉篇』によった可能性こそ指摘できる。『玉篇』残巻中に「渠」(谿篇)「も」はふくまれないけれど、佚文「亦川瀆也」が見出されている。(26)これは⑦の引く『字林』の文にほぼ同じであり、『玉篇』が「字

林』から「川瀆」の文字を引載していた可能性がみちびける。晋・呂忱『字林』は現存せず、佚文を輯成した任大椿『字林考逸』、李增傑『字林考逸統補』（広東高等教育出版社、一九八九年）にも「渠」条は見えないので、⑦の『字林』文が「四尺也」までか否かは不明である。しかし上掲「溪」の注記を勘案すれば、『玉篇』の利用を想定するのが合理的である。

『玄応音義』の異文関係の複雑ぶりをいちおう差し置いて、同書における不見が『玉篇』利用の論拠になりうるならば、たとえば⑧の出典も『玉篇』の可能性がたかい。⑧は経文「野人」(二七六中)の注記。「先進於礼楽……君子也」は『論語』先進篇冒頭の文であり、「包氏曰」以下は『論語』該文への包咸注であろうと推される。⁽²⁷⁾汲古書院本索引によれば、『玄応音義』が『論語』の包注を挙名するのは上掲「七仞」と、卷八「不訟」(一六七下)「包氏曰、訟猶責也」との二例のみである。つまるところ、『玄応音義』から⑧「包氏曰、謂鄙陋也」云々の文字は案出できない。そもそも『玄応音義』には「野人」の掲出も先進篇該文もない。『玉篇』残巻および佚文集に適例の収載は確認できず、また「謂鄙陋也」云々も見出せないが、『玉篇』が『論語』包注を引用していたのは確実に残巻中にも七例が知られる。⁽²⁸⁾現状では『玉篇』利用の蓋然性がたかい。

⑥「毛詩云、赫赫師尹、註云、赫赫、盛貌也」も同種の例である。これは『毛詩』小雅「節南山」に「赫赫師尹、民具爾瞻」と、その毛伝に「赫赫、顕盛貌」との引用である。『玄扈音義』に「赫」字をふくむ掲出句は「昕赫」と「赫奕」との二つだが、『毛詩』の引用はな

く類似の文さえない。『玄応音義』から引けないから残る『玉篇』からの転引に解決するだろう。

本節までの論述から、憬興が『玄応音義』と『玉篇』とを併用して、これらから外典を孫引きしていたことは明白になったろうと思われる。ただ両書を平等に参照したのではなさそうだ。そのあたりの事情を節をあらため述べよう。

d 『玄応音義』『玉篇』利用の序列

前節に述べたように、憬興が参照した『玉篇』は原本系であった。それは外典の用例集としては豊富な内容をもっていた。現存する『玉篇』残巻を閲するに、その充実ぶりは『玄応音義』をはるかに上まわる。ということは、『玉篇』によりさえすれば『玄応音義』をひもとくまでもなく上掲の外典の引用など容易にできてしまはずだ。にもかかわらず a・b 両節で論じたように、憬興は『玄応音義』からいくつもの外典の文章を引用している。この文献的状况は、憬興が優先的に『玄応音義』を閲しこれに適当な訓詁が見出せないばあい、はじめ『玉篇』に手をのびたと推測してようやく合理的理解に達することができる。つまり憬興は『玄応音義』を主に、『玉篇』を従に利用したということである。その一証として、たとえば②④の出典を検討してみよう。

②は「邑」「聚落」「厲」「戈」の注記である。このうち「厲」については、『玄応音義』からの転引であろうこと a 節に述べた。「邑」「聚落」も『玄応音義』に典拠としてふさわしい注文がある。まず

「邑」について。『玄応音義』卷八「邑中」（一六七下）に「周礼四井為邑、鄭玄曰、方二里也。広雅五里為邑……」とある。ほぼ同文が卷十七「郭邑」（三六六下）、卷二十四「封邑」（四九二下）にもあるが「九夫」以下が見あたらない。しかし同卷五「市井」（一一七下）に「周礼九夫為井、方一里也。白虎通曰、因井為市、故曰市井。説文八家一井」とあって、両者を接続すれば「邑」の注文が成る。ついで「聚落」について。『玄応音義』卷十四「聚落」（二九七下）に「韋昭曰、小郷曰聚……広雅落、居也。謂人所聚居也」とあり、同卷十七「聚落」（三六八上）にもほぼ同文がある。『述文贊』該注とそっくりである。「厲」が『玄応音義』によるだろうことを勘案すれば、「邑」「聚落」も同様であったことは見やすい。

しかし「戈」は『玄応音義』に一致する注文が見あたらず、出典は別書とまずは考えねばならない。別書の最有力候補は『玉篇』である。『玉篇』の「戈」項は散佚したが、さいわい部分的な復元ができる。『篆隸万象名義』に「戈、古和反、戟六尺六寸」（五帖三九ウ）とあり、佚文「戈、古和反、戟為戈」もひろえる。³⁰『述文贊』該条と一致する部分があることに注目しよう。積極的証拠はないものの状況的には、「戈」の注記は『玉篇』から引かれた蓋然性がたかい。

果たして②は『玄応音義』と『玉篇』とからの転引文が混在しているということになる。かりに憬興が『玉篇』を優先していれば、「邑」「聚落」「厲」の注記は『玉篇』から転引していたろう。この四字は『玉篇』に立項してあったはずだから。しかし「戈」になつてはじめて『玉篇』から引用したということは、まず『玄応音義』を手にして

それが不足であったから、ついで『玉篇』を引いたと考えてはじめて理解できる。じつは『玄応音義』に「戈」をふくむ掲出句は、卷二十二に「奮戈」（四四九上）があるのみ、なおかつ注文は「奮」のみを注解し「戈」には音注さえ施さない。憬興は、通例どおり「邑」「聚落」「厲」の注記をするため『玄応音義』を閲覧したが「戈」のみ適解を得られないことに気づき『玉篇』に手をのびたと推量される。

ついで⑩を見よう。⑩は「猥」「擾」「忽」「頼」「聊」の五字を注解している。そのうち「猥」は、『玄応音義』卷四「猥多」（九四上）の「烏罪反。字林猥、衆也。広雅猥、頓也³¹」と、同卷二十二「雜猥」（四五〇上）の「烏罪反。猥、惡也。字林猥、衆也。衆、雜乱也」とを合成すれば出来あがる。「猥」は『玉篇』残巻中になく佚文も確認されないが、『篆隸万象名義』に「猥、於隗反。能、衆、」とあることから、『玉篇』は「猥」に「於隗反」という音注をほどこしていたと知られる。これは⑩の反切「烏罪反」と異なる。状況的には『玄応音義』参照の可能性が高い。つづく「擾」は、『玄応音義』卷八「勿擾」（二六六下）の「如紹反……広雅擾、乱也」などを利用すればよい。³²⑩に「広雅」の文字がないのは、すでに⑩「猥」に既出のため略したと説明できる。『玉篇』佚文には「擾々、乱兒也³³」とある。「兒」字の有無は『玄応音義』利用説に有利である。つぎに「忽」について。汲古書院本索引は大治本にしたがい「忪」字で掲出し、卷十三「忪忪」（徐本では「怔忪」、二七〇下）と卷十九「心忪」（三九八上）との二例の条録をおしえる。「忪」は「忪」「忽」の異体である。前者に

「之盈反。古文忪同。之容反。方言怔忪、惶遽也」とあるのによれば、⑩の「古文忪」以下が書ける。「忽（忽、忪）」の『玉篇』佚文は確認できず、『篆隸万象名義』のしるす「忪」「忽」（五帖一四四ウ）を見るかぎり『玉篇』によった徴証は皆無である。「忽又作忪」に対応する句が『玄応音義』にないけれど、憬興みずからの作文と考えれば説明は可能だ。

しかし「頼」は事情がちがう。憬興は「頼」への施注に『孝経』を引く。『玄応音義』を閲するに、「頼」をふくむ掲出句は「頼締」（卷二、五二下）と「提頭頼吒」（卷十八、三八四下）との二条のみ、ともに「頼」に言及しない。また汲古書院本索引によれば、そもそも『玄応音義』は『孝経』を引かない。つまり、くだんの『孝経』は『玄応音義』からの引用ではありえない。『述文賛』に『孝経』が引かれるのは該条だけで、原典から引いたとも考えにくい。『玉篇』の「頼」の条に『孝経』が引かれていたか確認できないが、『玉篇』残巻を閲するに顧野王が『孝経』を引くのは確実で、「頼」条に『孝経』該条があった可能性はみとめられる。³⁴附言すれば「聊」を『玄応音義』は掲出しない。『篆隸万象名義』の「聊」条（二帖六オ）に「甘、」はなく断定はしにくいものの、やはり『玉篇』由来の可能性がたかいと思われる。

⑩でも⑭と同様の手順が推測できる。まず『玄応音義』に「猥」「擾」「忽」「頼」「聊」の適切な訓詁用例をさがしたが、後二者のみ適訓をひろえないうえに『玉篇』をひもといたと説明できる。

いま挙げたのはわずか二条ではあるが、『玄応音義』と『玉篇』と

の利用に序列のあったことは明らかと思われる。常識的にことは二条にとどまらないはずだし、そもそも『玄応音義』の優先的利用を前提にしなければ、憬興の『玄応音義』からの外典文の転引は説明しづらい。憬興にとって小学書を参照するのは外典を引くのが目的でない。むしろ適切な訓詁を得るために参照するのだ。その用には『玉篇』より『玄応音義』がふさわしかったということではなからうか。これについては後段で再説する。

e 陸法言『切韻』の利用

『玄応音義』『玉篇』以外に、憬興は『切韻』を参照している。『述文贊』には①②④⑥(二例)の都合五例、『切韻』の引用がある。典拠の掲出には「陸法言切韻」と「切韻」との二様がある。『玄応音義』に「陸法言」「切韻」の名が見えないことから、この五例は『玄応音義』からの孫引きではありえない。『玉篇』からの可能性もむろんない。c節で既述のように、憬興が参照した『玉篇』は原本系であった。つまり梁代成書の本撰本にちかいわけで、これに隋の仁寿元年(六〇一)に成った陸氏切韻が収載されることはない。この五例の『切韻』引用文は、直接引用と考えるのが穏当だろう。

「陸法言切韻」の挙名から、これは陸氏切韻であろうと、まずは推される。もっとも韻書というものはとかく異本を生じやすい。韻書の鈔者は往々にして韻書の使用者であった。使用の便にしたがい収録字の増減や注記の追加など、手入れのなされる公算がたかい。事実、陸氏の書が成って間もなく、これに改訂をなすものが多数あらわれたこ

とが知られる。厳密には憬興の利用本が陸氏原本ではなく、いくらか増刪をほどこした本であった可能性もくはない。ただ、わざわざ「陸法言」の文字を冠しているのだから、増刪本だったとしても撰者から陸氏の名をのぞくほどの増刪ではなかったらう。また⑥が二条ともただ「切韻云」といい「陸法言」を冠しないけれど、憬興が①②④の「陸法言切韻」と別本をつかう必要はなく、⑥は単に「陸法言」の文字が省略されただけと考えられる。

『広韻』(一〇〇八年成)に終着する『切韻』系韻書のうち、完存する最古のものが王氏切韻である。王氏切韻は七〇六年ごろに成ったといわれるから、『述文贊』とほぼ同時期の著作である。いちおう、わたしが検討の対象とすべきなのは、ほぼ王氏以前の『切韻』ということになる。もっとも陸氏から王氏にいたる約百年間に多数の改訂本のあったことは確実ながら、比較的情報の残る長孫訥言の箋注本(六七七年成)をのぞいて、これら改訂本の実態はあまり分明でない⁽³⁵⁾。また陸氏切韻がつとに散佚し敦煌などから発見された少量の残巻が知られるのみであることも出典調査をはばむ。これらの制約のなか調査をはじめよう。

最初になすべきは、陸氏切韻と推される残巻中に、くだんの施注対象字①「綜」、②「裂」、④「戢」、⑥「赫」「焜」があるか否かを調べることである。調査の結果、この五字の在処はともに残巻の脱落部分に相当し、陸氏の注記をじかに見ることはできない。しかし、われわれは首尾をそなえた王氏切韻ほか種々の『切韻』残巻をもっている。王氏切韻は前述のとおり、陸氏原本をほぼ忠実に保った部分と王氏に

よる新加部分とから成るので、王氏切韻と初期切韻などを併看することで陸氏切韻の文面をかなり復原することができる。

まず①について。王氏切韻に「綜〈子宋反、機縷〉」と、長孫氏の箋注本と推定される P.3696（二）に「綜〈機縷、□□反〉」とある。両切韻の符合から陸氏切韻にも同文であったと推される。これは①の「機縷（也）」におなじ³⁶。つぎに②について。王氏切韻に「裂へ々（呂結反）。破〉」とあり、加字加訓のすくない初期切韻とされる S.2071（切三）に「裂〈破〉」（反切は「呂薛反」とある。この共通から陸氏切韻は「裂」字にただ「破」の訓注を附したと知られる。これは②の「破（也）」にひとしい。ついで④について。「陸法言切韻云、止也」というのは「戢」字の注記である。王氏切韻「戢」に符合する部分はないが、『内府本刊謬補缺切韻』（王二）に「戢へ……止也」とあり、初期切韻という P.3799 にも「戢へ止也……」とある。「止也」も陸氏切韻の引用として無理なく説明できる。最後に⑥の二例について。これは経文「光赫、焜耀」（二七〇上）への注記。王氏切韻に「赫〈呼格反。赤〉」とあり、S.2071 にも「赫〈赤。呼格反〉」とある。「焜」は、王氏切韻に「焜〈火光〉」（反切は「胡本反」とあり、S.2071 も同文である。「赫」「焜」ともに陸氏切韻の引用に比するのが妥当だ。以上、①②④⑥の五つの「陸法言切韻」引用文を論じた。これらの引用文は例外なく、王氏切韻と初期切韻などとの共通から復原された陸氏切韻の文面に一致した。換言すれば、「（陸法言）切韻云」と引かれた文章は、ほぼ確実に陸氏切韻の佚文である。またこの五条における、陸氏切韻の引用文の範囲も確定できた。たとえば①では、「機縷

（也）」だけが陸氏切韻の文で、「音並同也。非此中義」は憬興の按文であろう。⑥の「毛詩云」以下、「又作煜」以下は陸氏切韻の文章ではないと判ぜられる。

さて憬興が陸氏切韻をじかに参照したとして、その頻度を見れば『玄応音義』にくらべ圧倒的にすくない。やはりここでも憬興は『玄応音義』を主に、陸氏切韻は補助に使っている。これを①を例に見ておこう。①の「陸法言切韻云」のまゝに「綜、子送反、習也」と憬興は注している。①は経文「博綜」への注記なのだが、「子送反、習也」は『玄応音義』卷一「博綜」（九下）の「子送反。綜、習也」によったと思われる。つまり、憬興はまず『玄応音義』を引いて、ついで陸氏切韻を引用しているのだ。また、憬興は「綜」の反切下字を「送」（去声一送）とし、陸氏切韻の「宋」（去声二宋）に異なる。憬興は「綜」字の反切をしるすさい、『玄応音義』の音注を優先したと推される³⁸。

おわりに

なお窮知するを得ないにしても、『述文賛』の引く外典文のすべては、『玄応音義』『玉篇』『切韻』の三書に包括されているはずである。はずと書くのは、『玉篇』の残存が不充分で探索の全きを保しがたいからだ。『玄応音義』『玉篇』の利用は外典文の引用にとどまらないと思われる。『述文賛』の注記には上掲二十六条のほか、訓詁についての注解がすくなくない。それらの執筆に『玄応音義』『玉篇』を利用しない手はない。

憬興の『玄応音義』利用はかれの所在する学統から得心できる。新羅浄土教には玄奘・慈恩の唯識法相の系統と浄影寺慧遠の系統と、二つの系譜をみとめるのが通解と思われる。憬興は前者につらなり、憬興が破斥する法位・玄一は後者の流れをうける。⁽⁴⁰⁾玄応の経歴は不明な点が多いとしても、玄奘の訳場に参加していたことは確定している。またその著述から玄応の学風が、玄奘の高弟であった窺基などと同傾向であったと推測されている。⁽⁴¹⁾つまり、玄応と憬興とはともに玄奘の学統につらなるのである。『玄応音義』は玄奘の新訳事業に聯絡した最新の仏典研究の成果であった。このことは憬興にその積極的利用をうながしただろう。

憬興は『玄応音義』を主資料に『玉篇』を補助資料に利用している。もしその逆に初めから『玉篇』を利用していれば『玉篇』だけで大部分の注記を書き得たはずで、『玄応音義』の出番はなくなっていただろう。憬興はなぜそうしなかったのか。上述の教学の系統とともに、『玄応音義』の仏典注釈における使いやすさも参照の理由であったと思われる。『玄応音義』と『玉篇』とは、二字熟語本位(詞典)と単漢字本位(字典)との形態上の相違がある。漢文を読解するには何が一語であるか、単語の理解が優先されようから、詞典のほうが有用とはいえる。また『玄応音義』は各項内にしばしば単漢字の注解をそなえるので字典の使用にもたえる。くわえて立項されている熟語は仏典のそれだから、仏典の難読の語彙が比較的そろっていることも『玄応音義』利用の利点になっただろう。

『玄応音義』は『玉篇』とともに、上代日本の仏典注釈にとっても

主要な工具書であった。『玄応音義』の日本への初伝についてはなお瞭然としないが、わたしは新羅経由の可能性は考えられてよいと思う。近年の研究によれば、八世紀の新羅仏教と日本仏教とは、従来考えられてきた以上に緊密に聯絡していたらしい。当時の日本にとって新羅は經典の重要な供給源⁽⁴²⁾であり仏教研究の中心であった。新羅僧の著作も大量に輸入されている。正倉院文書だけでも憬興ら二十二人の品々が新羅から持ちこまれた。⁽⁴³⁾經典以外にも多くの

『玄応音義』は天平年間(七二九〜七四八)の頻繁な書写が正倉院文書より確認できる。⁽⁴⁵⁾ちょうど新羅から大量の経論が将来された時期にあたる。『玄応音義』の新羅への舶載は『述文贊』の利用例から七〇〇年前後以前と知られる。そのころ新羅に留学中であつた日本僧の耳に該書の有用性が聞こえていたとは、ありうる事態と思われる。そうであれば新羅仏教の移入に熱心であつたかれらのこと、同書を日本に持ち帰ろうとしただろう。

わたしは『玄応音義』が唐から直接入ってきた可能性を否定するものではない。正倉院文書に見る『玄応音義』の鈔写は、たとえばみな玄昉の帰朝した七三五年ののちの史事で該書の初伝は玄昉によつたのかもしれない。ただ八世紀の新羅仏教と日本仏教との交渉をかんがみるに、新羅経由の可能性もひくくはないと思われるのである。⁽⁴⁶⁾

〔注〕

(1) このほか近人による輯本が二部ある。渡辺顯正『新羅・憬興師述文

賛の研究』（永田文昌堂、一九七八年）第五章にそなわる輯本『観無量寿経疏』、金相鉉による「輯逸金光明最勝王経憬興疏」（『新羅文化』第一七・一八合輯、二〇〇〇年）。東国大学校仏教文化研究所編『韓国仏書解題辞典』（国書刊行会、一九八二年）四一頁は、『金光明最勝王経略賛』五巻が大正新修大藏経刊行会に未収録本として所蔵されているというが未確認。憬興の著作は、『韓国仏書解題辞典』三七～四四頁、韓普光『新羅浄土思想の研究』（東方出版、一九九一年）一四二～一四七頁などに一覽されている。

(2) 憬興の伝記はよく分らないが、生年を六二〇から六三〇年ごろ、歿年を七〇〇年ごろに比定することで諸研究はほぼ一致している。『述文賛』が憬興晩年の著述であることは、該書の義浄『南海寄帰内法伝』（六九一年成）の引用よりほぼ確実である。これについても諸研究はほぼ一致している。渡辺頭正「憬興師の無量寿経第十八願観」（『印度学仏教学研究』第三四巻第一号、一九八五年）一二八～一二九頁、韓普光『新羅浄土思想の研究』（前掲）一三三～一四二頁、金亮淳「憬興『無量寿経連義述文賛』の思想的特徴——引用文献の分析を中心として」（『東アジア仏教研究』第八号、二〇一〇年）注2参考。

(3) たとえば、安啓賢『新羅浄土思想史研究』（玄音社、一九八七年）一〇三～一〇四頁。加幡亮俊「憬興の無量寿経疏について」（『印度学仏教学研究』第一六巻第一号、一九六七年）三七八頁、渡辺「新羅・憬興師述文賛の研究」（前掲）三四～三九頁、韓普光『新羅浄土思想の研究』（前掲）一五〇～一六八頁も、外典引用の多きを揚言する口吻である。なお『述文賛』の引く外典数は数え方によって相違が生まれるが、わたしの勘定では最大で二十六種になるはずである。

(4) 猿田知之は後掲の⑩⑪をとりあげ、『述文賛』の引く外典文の過半が『玄応音義』からの孫引きであろうことを示唆した。ただ猿田の主たる関心は善珠ら日本の仏家にあったのでそれ以上の詮索はされず、『玄応音義』に見えない条については直接引用か別項からの

抽出かなどといい曖昧な理解にとどまった。猿田『日本言語思想史』（笠間書院、一九九三年）四三七～四三九頁、同「南都仏教の語学的研究について（上）——善珠を中心として」（『シオン短期大学研究紀要』三三、一九九三年）八二～八四頁。また韓国の金亮淳（佐藤厚訳）「憬興『無量寿経連義述文賛』の思想的特徴——引用文献の分析を中心として」（前掲）も『玄応音義』からの転引を説く。ただ該論には出典調査の結果がしるされのみで論拠が不明である。金氏には「憬興の『無量寿経連義述文賛』研究」（韓国学中央研究院博士學位論文、二〇〇九年）があつて、究明の過程はこちらに詳述されているのだろう。本来、金氏の博士論文を参照すべきだが、わたしは入手できなかった。ただ邦訳論文からうかがうに、小論がおこなう『玉篇』との比較検討などは十全でなかったように思われる。小論を発表するゆえんである。

(5) 神田喜一郎「綴流の二大小学家——智憲と玄応」（『神田喜一郎全集』第一巻、同朋舎出版、一九八六年。初出一九三三年）一九六頁、徐時儀「玄応《衆経音義》研究」（中華書局、二〇〇五年）三〇頁。井野口孝「智光『浄名玄論略述』に引く『玉篇』の佚文について」（『大谷女子大国文』第二八号、一九九八年）一九〇頁。同「新訳華嚴経音義私記の訓詁——原本系『玉篇』の利用」（『文学史研究』第一五号、一九七四年）七〇～七一頁も特定の困難を例挙する。

(7) 『述文賛』は日韓の近現代に成った各種叢書に収められている。小論がよる二本のほか、浄土宗全書、正統藏経、韓国歴代文集叢書、韓国仏教全書など。みな直接間接に元禄十二年刊本を底本にしているようだ。寡聞にして古鈔本の現存を聞かず、同刊本はいまのところ最善のテキストと思しい。同刊本には元禄十二年十二月の年紀をもつ華頂義山の跋がそなわる。そこに「予曾憂此書流行之不遠、今採而校讎繡之于梓以張于世」とある。複数の本で校勘したらしく読めるけれど具体的情報をいわず成立の詳細は明らかでない。

(8) 併用の理由はこうである。施注字Xを検索するばあい、上古古籍出版社本索引がXにはじまる掲出句しか検出できないのに対し、汲古

書院本索引は周到にもXが二字目・三字目にある掲出句をもひろっている。この点、後者は前者にまさる。また後者には音注索引・引用書索引がそなわる。しかし徐本が他本から補録するも大治本・麗藏本には缺く条目があり、これらは汲古書院本索引からたどり着けない。汲古書院本索引を利用するばあいはその点に注意が要る。改善の策として両索引を併用しできるだけ漏れを防いだが、徐本におけるXをふくむ掲出句を網羅していない危険がつきまとう。

現存する『玉篇』残巻は系統を異にする諸本の混在である。上田正「玉篇残巻論考」(『論集』〈神戸女学院大学〉第一七巻第一号、一九七〇年) 参看。ただこれらはみな原本系にはちがいになく、小論の行論におおきな影響はないと思われる。

(10) 太田斎「玄応音義に見る玉篇の利用」(『東洋学報』第八十巻第三号、一九九八年)、北山由紀子「顧野王『玉篇』と玄応『一切経音義』との関係」(『開篇』二六、二〇〇七年。もと一九九七年五月の訓点語学会研究発表会発表レジュメ) が『玉篇』利用説を説く。木田章義「顧野王『玉篇』とその周辺」(高田時雄編『中国語史の資料と方法』京都大学人文科学研究所、一九九四年) も、『玄応音義』と『玉篇』とに反切上字「達」が共通することを『玉篇』系の書物が利用された徴証にみとめるので利用説にかぞえられる(一〇六頁)。非利用説の論著としては、徐時儀『一切経音義』引『玉篇』考(『開篇』二七、二〇〇八年) を挙げるにとどめる。なお北山論文の直前に附された太田斎「紹介者による説明の弁」二六四頁によれば非利用説が従来通説である由。しかし利用説の上掲三論文が提出した論拠のほか、窺基『法華経玄賛』(六八〇年成) のさかんな『玉篇』引用を見るに、利用説の蓋然性はたかいたと思われる。窺基(六三二〜六八二) は玄奘(六〇〇〜六六四) の高弟である。後述するように、玄奘は玄奘の訳場にも列した、窺基の先輩にあたる人物だから玄奘を介して二人はつながる。当時有数の用例集でもあった『玉篇』のこと、窺基のごとく玄奘も利用したとするのは理解しやすい。玄奘の訳場には種々の工具書が準備されていただろう。そ

のうちに『玉篇』もあったかもしれない。『法華経玄賛』所引『玉篇』佚文については、矢放昭文『法華玄賛』に見える『玉篇』等の佚文(『均社論叢』一二号、一九八二年)、白藤禮幸「注釈の輸入——窺基撰『法華経玄賛』について」(五味智英先生追悼論文集刊行会編『上代文学論叢』笠間書院、一九八四年) 参看。

(11) ①の「綜」も『玉篇』残巻中に掲出があり三書の比較が可能だが、外典文ではないのでここにふくめない。なお①については後述するはずである。

(12) 岡井「玉篇の研究」(前掲) 七九頁、上田「玉篇残巻論考」(前掲) 参看。

(13) なお『玄応音義』に「辜較」の立項は、巻八(一七三下)と巻二十(四二四上)と二つあるが『述文賛』に一致する文はない。

(14) 任継防纂『釈名匯校』(齊魯書社、二〇〇六年) 一三九頁参看。

(15) 『玄応音義』巻九「偃蹇」(二〇〇上) もほぼ同文だが『左伝』の文を缺く。

(16) ②がしるす「左伝」の書名は『玉篇』の挙名法とちがう。西端幸雄「玉篇零巻出典索引」(『訓点語と訓点資料』第五九輯、一九七六年) によって『玉篇』残巻(古逸叢書本)中の『春秋左氏伝』の書名の挙げ方を点検してみた。結果は一目瞭然で、「左氏伝」が二〇三例(「伝左氏」の一例と「左氏」の一例とをふくむ)、「左伝」が三例であった。「左伝」の三例も、一例は「氏」字の誤脱、一例の「氏左伝」は語序を誤っている可能性が高く、すると残る一例も「氏」の脱字で本来「左氏伝」であった推定が成る。つまるところ、『玉篇』は「左氏伝」の名義で『春秋左氏伝』を引いたのだ。しかし『玄応音義』はおおよそ「左伝」で挙示し、『玉篇』残巻とは明白な差別がある。②が「左氏伝」ではなく「左伝」と記するのは、それが『玉篇』ではなく『玄応音義』からの転引である反映かもしれない。ただ、『述文賛』に『春秋左氏伝』の名が現れるのは該条の一例のみであるうえ、憬興が「左氏伝」を「左伝」に略記した可能性は消滅しないので、あくまでも②の『玄応音義』利用説の一傍

証になる可能性があるというにすぎない。

『玄応音義』卷八および卷十二の各「不跌」条（一八〇上、二五八上）にも同文を含んだ注記があるけれど、それでは「亦偃也」が案出できず出典には不可。

(18) たとえば、上田正「玄応音義諸本論考」(『東洋学報』第六三卷第一・二号、一九八一年) 参看。

(19) ただ上述した『玄応音義』撰述における『玉篇』利用説が証明されれば、『玉篇』の脱字を『玄応音義』がはからずも踏襲してしまった可能性を考慮しなければならない。そうなれば⑬は『玄応音義』か『玉篇』かの択一には無益になる。

(20) 同一文字の注解のために連続して複数の外典を引く条目は、(10)(13)(20)

②①のほかに③王逸↓説文、⑥「赫」の切韻↓毛詩、⑦「渠」の広雅↓字林、⑮礼記↓玄公（鄭玄）↓論語、⑯「猥」の字林↓広雅、⑰「眄」の説文↓説文および「睽」の説文↓蒼頡篇、⑳「魯」の孔安国↓方言、㉑「邑」の周礼↓説文の都合十二条をかねてゐる。『述文賛』と『玄庇音義』とがともに同一書の同一条を引いている、それも複數連続して共通するなどという事態は偶然の産物ではありえない。ただ『玉篇』も同様であった可能性を払拭できないので扱一の論拠にはつかいにくい。

(21) 後述のように、『述文贊』は陸氏切韻(六〇一年成)を利用している。同書は『玉篇』より約六十年のちの成書だから、いちおうこの『玉篇』が陸氏切韻からの転引である可能性をうたがっておくべきだろう。陸氏切韻の残巻には「玉篇」の書名は見えない。完存する王氏切韻(七〇六年ごろ成)は陸氏切韻の増補版で、陸氏原本をほぼ忠実に保った部分と王氏による新加部分とから成る。古屋昭弘「王仁响切韻と顧野王玉篇」(『東洋学報』第六五卷第三・四号、一九八四年) 参看。該書には「玉篇」「顧野王」と記名した引用が各一例あるがともに新加部分である。陸氏切韻に「玉篇」の名はないというべきで、『述文贊』が同書を介し「玉篇云」と明記引用することはありえない。

(22) 木田章義『玉篇』とその周辺（『訓点語と訓点資料』記念特輯一九九八年）三七～四一頁。

(23) 『篆隸万象名義』が「仞、如震反。一尋」(一帖五十才)というよう

に、「切」は「尋」に通用する。「切」も「玉篇」残卷にないが佚文

は知られる。岡井一玉篇佚文に二七尺或八尺（一二三番馬淵

『大谷大学図書官蔵』『三政旨帚主集』
○開記 大谷大学、一九九二

手)に「七尺或八尺謂之切」(二番)、井野口孝「大治本『新華教

『音義』所引『玉篇』佚文（資料）・其一（『愛知大学国文学』第

三十二号、一九九二年)に「如震反。七尺曰切。度高曰揣。度深曰

切。七切合数四十九尺也」(七七番)、おのおの拾われている。「二

「尋」についての諸解は、清の顧炎武『日知録』卷三十二「仞」にく

わしい。

(24) 惠谷隆戒「新羅義寂撰無量寿経述義記復原について」(『浄土教の新

研究』山喜房仏書林、一九七六年。初出一九五八年）四二八頁。

(25) たとえば、井野口孝一「智光『浄名玄論略述』に引く『玉篇』の佚文

について」(『大谷女子大国文』第二八号、一九九八年)一九〇頁参照。

〔玉篇〕夫文二一〇二上二条、
〔玉篇〕夫文補三一三四八条。

(2) 岡井「王篇佚文」一〇五二番 黒淵「王篇佚文補正」一三四番
(7) 見序『論語』者本の先進篇此文の句主はない。句成章句の母本を問

(2) 現在『語記』語スの先、逆篇語ニハ包注にナシ。包屈章句の轉スを問
しても「謂鄢郢也」云々は確認できず、「謂鄢郢也、郢外曰野、品

外謂郊のうち、どこまでが包注なのか判然としない。くだんの文

章は新得の包注佚文であろうか。ただ、『論語』雍也篇「質勝文則

野」に集解が「包氏曰、野如野人、言鄙略也」と注するのをふまへ

れば、「謂鄙陋也」が包注で「郊外曰野、邑外謂郊」は顧野王之按

文かもしれない。

(28) 西端幸雄「玉篇零卷出典索引」(前掲)による。

(29) 『無量寿経』 大正蔵本は「聚落」ではなく「丘聚」に作っている。

同本の校記は何もいわない。懺興のもちいた『無量寿経』は一聚

落」に作っていたということか。

- (30) 井野口孝「大治本『新華嚴經音義』所引『玉篇』佚文(資料)・其一」(前掲)五二番。ほかに佐藤義寛『玉篇』佚文集」(前掲)一二番にもあり。
- (31) 『玄応音義』には卷十一(二二一)下と卷十五(三三〇)上)ともに「猥多」の掲出があり、これら三条みな同文である。
- (32) 『玄応音義』卷九「勞擾」、卷二十三「擾動」などにも同文あり。
- (33) 岡井「玉篇佚文」三四六番、馬淵「玉篇佚文補正」三四六番。『篆隸万象名義』には「擾、如紹反。煩、乱、」(二帖三六才)とある。
- (34) ⑯の「一人有慶、兆民頼之」は『孝經』天子章の正文(現行今古文に異同なし)、もと『尚書』甫刑(呂刑)の一文である。「註云、頼、蒙也」は『尚書』の注ではなく『孝經』の注を指すはずで、果たして該注は鄭玄注に合致し、⑯に引かれた『孝經』が古文孔伝ではなく今文鄭注とみちびける。林秀一「敦煌遺書孝經鄭注復原に関する研究」『孝經學論集』明治書院、一九七六年)七三頁参看。『玉篇』の引く『孝經』が今文鄭注に限定できれば、⑯の『玉篇』利用はますます有力になるはずだが現状ではむづかしい。西端幸雄「玉篇零卷出典索引」(前掲)によれば、『玉篇』残巻中に『孝經』を引くもの七例。今文鄭注に断定できる条はない。『隋書』經籍志の孝經類小序に「梁代、安国及鄭氏二家並立国学、而安国之本亡於梁乱、陳及周齊唯伝鄭氏」とあり、梁代の今文古文並立、梁末の混乱による古文『孝經』の散佚が知られる。『玉篇』成書は侯景の乱以前の大同九年(五四三)といちおうされるから、顧野王が古文孔伝を引いた可能性は考えておかねばならず、今文鄭注の専用をいうことはできない。なお古文孔伝の流伝には諸説あるが、いま佐野大介『古文孝經孔氏伝』偽作説について」(『待兼山論叢』第三四号、二〇〇〇年)にしたがっておく。
- (35) 古屋昭弘「王仁响切韻に見える原本系玉篇の反切——又音反切を中心に」(『中国文学研究』(早稲田大学)第五期、一九七九年)一三〇頁、上田正「切韻各説」(『切韻逸文の研究』汲古書院、一九八四年)参看。
- (36) なお『玉篇』残巻が「綜」条を含み、その卷二十七(一二七)に「子宗反……野王案、説文、機縷持絲交者也」とある。
- (37) 上田正「切韻逸文の研究」(前掲)も、この五条を陸氏切韻の佚文として採録する。
- (38) ただ『述文贊』のしるす反切は『玄応音義』と異なるものもすくない。憬興が全面的に『玄応音義』の反切を写したのか否かには慎重でありたい。
- (39) 恵谷『浄土教の新しい研究』(前掲)五七―六一頁。
- (40) 神田喜一郎「綴流の二大小学家——智鷲と玄応」(前掲)一九九―一九六頁および口絵、徐時儀『玄応《衆經音義》研究』(前掲)二一―二七頁。
- (41) いくらか例を挙げておこう。新川登亀男『日本古代の対外交渉と仏教——アジアの中の政治文化』(吉川弘文館、一九九九年)三二四―三二九頁によれば、新訳『大般若經』(六六三年、玄奘訳)は大宝山間の新羅使による将来と推測される。これは六百巻の大部なものだ。皆川完一「道慈と『日本書紀』」(『中央大学文学部紀要』一九一、二〇〇二年)、勝浦令子「金光明最勝王經」の舶載時期」(『純日本紀研究会編『純日本紀の諸相』塙書房、二〇〇四年)は、新訳『金光明最勝王經』十卷(七〇三年、義浄訳)の舶載について、従来の通説であった道慈による唐からの直接将来説を相対化し新羅經由の可能性を指摘している。おそらく旧訳から新訳への移行は新羅のほうが早かったろう。なおこれまで日本に三国時代および統一新羅の写経は現存しないとされてきた。しかし山本信吉「聖語藏『大方広仏華嚴經自卷七十二至卷八十』の書誌的考察」(『正倉院紀要』第二八号、二〇〇六年)が、八世紀中葉の新羅写経を正倉院の写経中に発見した。これまで奈良写経と考えられてきたうちに新羅のものが混じっている可能性が出てきた。
- (42) 新羅仏教学の影響の重篤は、八世紀の日本でおこなわれた一切経の訓読法が新羅テキストのつよい影響下ににあることに象徴的に表現されているように思われる。小林芳規「日本の經典訓読の一流流」

『汲古』第五五号、二〇〇九年）参看。日本僧の著作に新羅仏教学の影響が顕著に見られる例がある。安澄『中論疏記』はその一例である。安澄（七六三〜八一四）は大安寺に住した三論の学僧として名高い。伊藤隆寿「安澄の引用せる諸注釈書の研究」（『仏教学部論集』〈駒澤大学〉第八号、一九七七年）一六・一二八〜一二九頁参看。なお『中論疏記』が『玄応音義』と『玉篇』とを併用していること、白藤禮幸「安澄『中論疏記』所引の『玉篇』について」（『二松』第一八集、二〇〇四年）、同「安澄『中論疏記』中の内典系音義書について」（『二松』第一九集、二〇〇五年）が論じている。これらの背景に七世紀後半から新羅へ送られ留学僧の存在があるのはうたがいない。

（い） けだ まさひろ 非常勤講師

二〇一一年十一月十四日受理

- (43) 福士慈稔「十世紀初までの日本各宗に於ける新羅仏教の影響について」（『見延論叢』第十二号、二〇〇七年）。なお現存するものは、角筆の存在で話題になった元暁『判比量論』断簡がある。同断簡は蔵印から光明皇后の旧蔵品と知られる。宮崎健司「大谷大学博物館蔵『判比量論』断簡の性格」（『日本古代の写経と社会』塙書房、二〇〇六年。初出一九九二年）、小林芳規「新羅の角筆文献——大谷大学蔵判比量論に加点された角筆の文字と符号」（『角筆文献研究導論』上、東アジア篇、汲古書院、二〇〇四年）参看。

- (44) 東野治之「正倉院文書からみた新羅文物」（『遣唐使と正倉院』岩波書店、一九九二年。初出一九八〇年）。

- (45) 山田孝雄「一切経音義刊行の顛末」（『典籍説稿』西東書房、一九三四年。初出一九二五年）二六五〜二六六頁。

- (46) 附言しておく。『玄応音義』と『玉篇』と、奈良時代における両書参照のさまを関するに、『述文贊』に同様の序列があったように見うけられるものがある。たとえば善珠『因明論疏明燈抄』（七八・二二・年成）である。善珠は両書を併用しているが、『玄応音義』が訓詁の基本書であったのに対し『玉篇』は一工具書にすぎなかった。井野口孝「善珠『因明論疏明燈抄』所引『玉篇』佚文攷」（『国語文字史研究会編『国語文字史の研究』八、二〇〇五年）参看。また仏典

音義であるが、大治本『新華厳経音義』と『信行大般若経音義』とでも同様の序列がみとめられる。池田証寿「上代仏典音義と玄応一切経音義——大治本新華厳経音義と信行大般若経音義の場合」（『国語国文研究』第六四号、一九八〇年）参看。『玄応音義』『玉篇』への態度の相違は新羅仏教の反映かもしれない。ただ善珠は玄昉の門弟といわれるから唐からの直接の影響である可能性もちいさくない。